

一九〇〇年～一九二〇年代、読書の中の〈キュリー夫人〉

— 女子教育の文脈とメディアに注目して —

岸 あゆり

一 キュリー夫人の問題系

キュリー夫人といえば、ラジウムを発見した女性科学者として知られている、《伝記》の代表的な対象となっている人物の一人であらう。キュリー夫人誕生から百五十年経った現代でも伝記が読み継がれ、平成に至るまで国語教科書にも採択されていた¹⁾。表象の中の〈キュリー〉はその時代時代において強い意味を持ち、読者に受容されてきたのである。

現代の女性のうちで一番廣く男からも女からも、よく知られてゐる人は誰かといふに、何んといつてもキュリー夫人を筆頭に数へあげなければなるまい。吾々がチツとは学問をして、科学の事など口にする年輩になつた頃には夫人は既に有名になつて居つたから、少くとも今から十五六年前に、著名な「女

科学者」として持て囃されてゐた事と考へられる。

(渡辺忠吾『科学新話』岩波書店、一九二二年七月)

これは一九二二年にキュリー夫人に寄せられた評価である。「著名な「女科学者」という批評は現代の私達にも通じる一般的な〈キュリー〉評価であると言えよう。ではちょうど十五年前に〈キュリー〉に寄せられた批評はどのようなものだったのだろうか。

キュリー先生は昨年巴里の街で馬車で過て轢死なされましたが、其夫人は助手を使って今でも大に実験を重ねられて居らるるそうです。こう云ふのは實に内助の婦人の亀鑑と申してもよいだらうと考へます。

(聾啞子「化学研究室より」『読売新聞』一九〇七年二月十五日)

以上は新聞付録の科学コラムによるが、この〈内助の亀鑑〉という認識は、後述するように学術雑誌を除く当時の多くの言説の中で行き渡っていた。その意味では〈キュリー〉は二面性を持って受容されてきたとも言えるだろう。しかし一九〇七年の「内助の婦人の亀鑑」という評価は忘れ去られ、一九二二年には当たり前のように「女科学者」として認識されていたことをここでは指摘したい。本稿はその認識の変容を生み出した〈力学〉を明らかにすることに最大限の注意を払っていきたい。〈科学者〉という評価が覆い隠した、もう一つの側面に光を当ててみたいのだ。その際に〈キュリー〉を伝えるメディアに注意して、受容の様相を明らかにする。いわば〈キュリー〉が伝わっていく現象全体を事件として設定したいのである。

〈キュリー〉の受容について触れた論は、管見の限りでは二つの知見があるが、いずれもキュリー夫人の次女エーヴ・キュリーによる『キュリー夫人伝』(一九三八年)の受容を対象としている。戦時下の出版に残る爆発的なベストセラーとなったことから窺えるように、『キュリー夫人伝』が作り出した〈キュリー〉像の影響は大きい。しかし、その大きさゆえ『キュリー夫人伝』より以前に流通した〈キュリー〉像は注目されず、管見の限り論じられてこなかった。『キュリー夫人伝』は読者を知識層にまで押し広げたのだが、ヒットセラーの陰にはそれを導く前史があったはずである。日本で〈キュリー〉受容の始まる一九〇〇年代から二十年間の読者はどのように〈キュリー〉を読んだのだろうか。

本稿で分析を試みるのは、一九〇〇年代から一九二〇年代にかけ

ての〈キュリー〉の受容という現象である。この二十年に渡る期間の受容の分岐点を仮定し、次のように受容時期ⅠとⅡに分類した。

〈受容時期Ⅰ〉

A 西洞たみの「科学者キュリーの夫人」(『偉人に及ぼせる夫人の感化』内外出版協会、一九〇八年)

B 松浦政泰編訳「賢妻キュリー—化学界の大黒柱」(『近世名婦伝』大日本文明協会、一九〇九年)

C 松浦政泰編「夫妻の協力」(『婦人美譚』精美堂、一九一一年)

D 高須梅溪「良人を助けて科学上の新発見を為す」(『東西名婦の面影』家庭百科全書第三二編、博文館、一九一一年)

E 前田雪子「仏国物理学者ピエール、キュリーの妻」(『偉人の妻』家庭百科全書第三七編、博文館、一九一一年)

F アリス・コークラン、林静太訳「ラジウムの発見者キュリー夫人」(『婦人の典型』警醒社、一九一四年)

(原著者) Alice Corkran, London, 1900 『The Romance of Woman's Influence』

〈受容時期Ⅱ〉

G 松平道夫「キュリー夫人—ラジウムの発見」(『ニュートン』発明物語第二二編、大鑑閣、一九二三年)

H 中西芳朗「ラジウムの発明 キュリー夫人」(『発明美談』学校家庭教育資料叢書、コドモ芸術学園、一九二七年)

I 栗原登「ラジウムの発見者 キュウリー夫人」(『子供のための発明発見家物語』文化書房、一九三一年)

二 「伝記文」の叙法

本項では受容時期ⅠのA～Eの作品を取り上げ、一九〇八―一九一一年当時において発信されていたメッセージを言説に即して分析してみたい。A～EはFの原著であるAlice Corkran『The Romance of Woman's Influence』（一九〇〇年）を元になっていると考えられるが、忠実な訳ではなく、抄訳または一部訳となっている。A～Eのいずれも（キュリー）にとどまらず古今東西の偉人の母や妻を題材にした（伝記文）であり、毎月一回刊行された博文館の『家庭百科全書』に組み込まれた（E）ことから分かるように女性向けの修養書であるという共通の特色がある。では、（キュリー）が「婦人教育の欠陥を補^③」うという女子修養書の中でどのようなメッセージを託されていたのか見ていきたい。

まず科学史に立ち入り、（キュリー）受容の起源を確認しよう。キュリー夫妻がラジウムの発見を発表したのは一九〇〇年である。日本で最初に「キュリー」の文字を伝えたのは一九〇〇年『東京物理学校雑誌』百十号の「雑報」で、『ポロニウム』及『ラヂウム』線二就イテ」という「竹立子」寄稿の文章に「此二新元素を発見セシキュリー（Curie）夫妻ハ此二新元素ニヨリテ生スル放射線ニ付キ次ニ述ブルガ如ク」と、「キュリー」の文字が見える。その後は一九〇二年『東京物理学校雑誌』から一九〇九年『中外医事新報』まで、海外の雑誌の論文を翻訳し、紹介したものが多い。その中ではキュリー夫人について触れるものではなく、夫であるピエール・キュリーの計報がもたらされるにとどまっていた。この

段階では雑誌上では医学・物理学の専門的読者による科学的知見の紹介があるほかは、新聞紙上ではラジウムの効果が喧伝される程度であったのだ。

では、どのような経緯で（キュリー）は女子修養書に吸い上げられたのだろうか。女性史研究者の小山静子は各時代の女子修身書を検討し、日清戦争後、知識による内助や女性の道徳性に対する注目が集まり、単に従順であることから（賢妻）であることへと良妻の意味が変化したと論じている。試みに『高等女学校用修身教科書』（文部省、一九〇四年、改訂三版）を繙くと「夫を助くべきこと」という項目がある。「妻は平生その任とする所を守りてこれを尽し、以て間接に夫を助け、進んでは直接に夫の事業を補ひ（…）」と家事による内助だけではなく、確かに「夫の事業」に対する知識による内助を求めていると分かるのである。このような時期に、（キュリー）がその典型として見出されたのではなからうか。

実際の作品Bに即して見ていきたい。BはAと違って、最後に「良妻の資格」として作者・松浦政泰の評が付け加えられている所に特徴がある。日本女子大学校教授であった松浦は「人の妻たらんものは、よく夫を慰めて内を顧みる煩ひなく、外に向ひて働き得るやうなすべし」（B）という良妻への教訓を「昔風の良妻」と退けた上で、次のように述べている。

『妻にありたきは、夫の業を夫のみの業と思はで、夫の業やがて我業なりと、常々思ひこみてあらん心がけなり。固より

夫の画筆執る傍にありて、夫の海を描けるに船を描き添へ、夫の弓引く後に立ちて夫の弦持つ手を曳けといふにはあらず、唯夫の業を、よそ事のやうに思ひ居らざれをいふ事なり」。これ儘かに前者に一步を進めたる良妻ならんも、此二十世紀の活動世界に於ける理想の良妻は「夫の海を描けるに船を描き添へ、夫の弓引く後に立ちて夫の弦持つ手を曳く」所の智徳兼備の女子なるやも知るべからず。

(B) (傍線は引用者による。以下同様)

「夫の業やがて我業なりと、常々思ひこみてあらん」という「心がけ」だけではなく、実際に知識をもつて夫の仕事を内助することとを理想として見ることが取れる。(内助)の模範として「キュリー」は女子修養書に見い出されたのだ。そしてそのような「キュリー」像が発見されると、その生涯はその視点によって配置し直され、構成されてしまうのである。実際に「伝記文」を見てみよう。「キュリー」の幼少時についてはBはこう書き出していた。

少女は幼時少時を父の実験室に費しつ、少しく生長しては、白の前掛けもて頭も足も包みつつ片手に箒を握りて、或は父の書物も塵を払い、或は取り乱れたる器械を片付け、或は又父の働を見物したりけり。年齢の加わるに随ひ、科学に対する興味もおのづと深くなりゆき、父が堅忍不拔の研究に同情を寄せて、わが手に適ふ所の事は、何くれなく之を助け、(…)

頓て父の片腕ともなり、其研究に欠き難き人物となりぬ。(B)

(…) は中略を表す。以下同様)

父を「助け」たという幼少時の逸話は「白の前掛け」「片手に箒」といった具体的な描写で補強され、「内助」という評価を支えている。この時「科学に対する興味」があたかも自発的な動機として持ち出されることにも留意したい。引用部の「父の片腕」に続いて「父の立派なる高弟」となり学生時代には「教授の助手」へと「成長」したと「伝記文」は伝えている。そしてもちろん、その延長線上には夫の共同研究者としての姿も。「内助の亀鑑」であるところの生涯を「伝記文」は紡ぎ出しているのだ。

また、Dは「ラデイユムの発見者キュリーは、其の妻スクロドウスカの内助に依つて成功の栄冠を戴くことが出来たのであります。」と夫ピエールの成功の原因として、まず妻の「内助」を措定し、「キュリー」の生涯を語る構成をとっている。B・D共に「内助」の下に幼少時から一貫した生涯を構成している。この「伝記文」による矛盾のない生涯語りの叙法はA～Eに共通しているのである。

ここまで「内助」に注目して「伝記文」の叙法を見てきた。次に、「伝記文」というメディアの意義について考え、なぜそのメディアで作品が流通したのかを考えたい。「伝記文」というメディアの機能について、Cの三輪田真佐子による「序」はこう述べている。

千里万言の空論、時に益なきあらざれども真に世道人心を導

くに足るものは、実践躬行の活文字ならんかし。現代女子のために著述せらるるもの、日に月に多きを加ふるは、全く文化の賜にして、こよなき幸にこそ。さはあれども、空論と同じせんも不可なきものも、決して少しとせず。(C)「序」

Cの作者・松浦政泰による「跋」では「今日は事実の時代である。統計の時代である。空論は人を動かさず。理屈は世を尽せない」と述べられ、世間に蔓延する「空論」に對置して「伝記文」を「人を動かす」「実践躬行」として据えようとする意図が窺えるのだ。

では「伝記文」を「活文字」という強いメディアに押し上げた背景には何があったのだろうか。高須梅溪が「近頃出版界は一種の伝記熱に感染して居ます」と述べたように、明治後期は伝記の一大刊行が行われた時期であった。⁽⁸⁾なぜこの時期に伝記が多く出版されたのか。その陰には明治三十年代から過熱した「偉人崇拜」という修養熱があったのである。筒井清忠は明治三十〜四十年に「アノミー」状況への対応として「修養」を直接・間接に目的とする思想・運動が多様な形で登場してきた⁽⁹⁾ことをふまえ、「修養書ブーム」が到来したと指摘している。

偉人崇拜がその母や妻への崇拜へと通じたのではなからうか。そこで大町桂月は「文字を解する女子、せめて五百人の女子の伝記をよみて、之を我心に融化すれば為めに奮励せらるべく⁽¹⁰⁾」と述べ、「伝記文」と自己の「融化」を推奨したのである。この時期には「伝記文」を媒介として偉人と自己を接続するという読書行為の回路が開かれたのであった。

〈キュリー〉はこの時期においてラジウムを発見した科学者としての主体を形成されることはなかったのである。称揚されたのは「夫妻共同の仕事」を支えた〈キュリー〉の〈内助〉という従属性であり、それは〈伝記文〉の語りの中で読者に接続されたのだ。

三 差異化される〈良妻賢母〉

前項では〈キュリー〉の〈内助〉が称揚され、〈伝記文〉がその〈生涯〉を一貫したまなざしで紡ぎ出す様相を確認した。

本項では受容時期Ⅰに分類したFアリス・コークラン『婦人の典型』(林静太訳)を扱い、ⅠからⅡへの過渡期の評価軸を捉えることを目的としたい。

一九一四年の〈キュリー〉言説において企図されていたことは何だったのだろうか。先に結論を述べると、それは〈キュリー〉そのものへの賞賛だけではなかったのだ。Fの訳者・林静太による「訳者自序」でその翻訳の意図を確認しておきたい。

人の幸不幸、運不運、有識無識、又世の開明野蛮等が、婦人の勢力圈内たる家庭に端を発せるものなることを知らざる程、憫むべき者なし。彼の英国に於ける女權拡張論者の如き、又近者我国にも勃興せる所謂新しき女の如き、実に此種の一例なり、彼等は男女各自の職分及び義務の自然に明白なる區別あるを知らざるなり。(F「訳者自序」)

「人の幸不幸」が「家庭に端を発する」とし、一九一一年の青鞵

社による「新しき女」を批判しているのだ。引用部に続いて「家庭の乱れ」に憂いを抱いていたときに「偶々」入手した本が「本書の原本なAlice corkran『夫人内助物語』the Romance of Woman's Influence」であつたという林の個人的なエピソードが紹介されている。このような翻訳までの経緯を持つ書物は（キュリー）については次のように言及している。

夫と協力して此一大事業の完成に於ても、婦人の最も不得意とする科学的方面に於ける天才、否是れ亦夫を助けんが為の熱誠に他ならざりしを知らん
(F「訳者自序」)

注目すべきはラジウムの発見という「一大事業の完成」を「科学的方面における天才」ではなく「夫を助けんが為の熱誠」によるものと位置付けていることである。ここには成功という事後的な地点から遡及してその原因を見定めようとするまなざしが働いているのである。そのまなざしは「新しい女」達への否定的評価を経由して（キュリー）の夫への（内助）という「家庭」における働きかけへと向かったのだ。この時期の（キュリー）には「新しい女」という青鞥に集った女性達（家庭）を顧りみないという評価が与えられた）への否定的評価と相反する評価が与えられていたのである。むしろ青鞥に対するマイナス評価のために「社会研究家、文明批評家、教育者」に対してその夫への（内助）という女らしさがますます顕彰されたといつてもよい。林はまた（キュリー）の（内助）を次のように定位している。

雖然如此、此不自然なる趨向に対して起れる反動的保守的思想も亦、甚だ因循姑息にして到底現代婦人の渴を医するに足らず。多く昔の女子教育が开なり〔…〕如斯んば女子は遂に、柔弱、無氣力、無智、無能なり、従つて独立的聡智を欠き、眞の賢母良妻として男子を感化し、助導し、忠告し、慰藉し、鼓吹する等の実を挙ぐる事、眞に望むべくもあらず。女子の社会的地位を改進せしめること、是れ亦刻下の急務なりとす。
(F「訳者自序」)

この時期は女子教育の過渡期であり、「眞の賢母良妻」として、「新しい女」的なものではなく、しかも従来の（良妻賢母）思想を差異化した新しい規範が求められていたのである。その規範こそ学問を身に付け、夫を（内助）する「眞の賢母良妻」であつた。その「眞の賢母良妻」の地位に（キュリー）は据えられたのだ。では、第一次世界大戦期周辺の女性たちに何が規範として求められていたのか、当時の女子修養書の言説を見てみよう。

△所謂良妻賢母 それから女子教育の目的は良妻賢母に在るからと云へども、只夫の機嫌を取り、子を育て挙げれば善いではいけぬ。一等国の婦人らしく、学問を活用して多くのことをせねばならぬ。何でも良妻賢母になりさへすれば、他を顧みないと云ふのは、実におこがましいことであります

(田中久編『結婚前後の修養』尚栄堂、一九一六年)

この時期は学問を受けた女性が飛躍的に増加し、第一次世界大戦の欧米諸国の女性の活躍を見て、日本の女性達が〈良妻賢母〉の中でどのように学問を生かしていくのかに注目が集まった時期であった。ただ結婚して家に閉じ籠もるだけの所謂〈良妻賢母〉は批判的になり、〈家庭〉と〈学問〉の両立を図る〈良妻賢母〉像の読み換えが行われたのである。

IからIIへの移行期である第一次世界大戦時の〈キュリー〉受容として特徴的なのはキュリー夫人の科学上の評価とは別のところで科学者〈キュリー〉の価値が高められるといった奇異な現象であった。その価値を高めた土俵こそ逆説的にも青鞥によって見いだされた「家庭」ではなかったか。こうして〈キュリー〉は「家庭」の中で発見された。〈キュリー〉は「新しい女」という〈対抗〉勢力と出会った時に初めて、「女子の社会的地位を改進せしめる」という「急務（林）」を負った〈起爆剤〉としての機能を發揮し始めたのである。

四 〈発明物語〉の対話

前項では〈良妻賢母〉思想の過渡期に「新しい女」と相反するようなポジティブな評価が〈キュリー〉に付与され、評価を高めたことを考察した。本項では受容時期IIの三作品を扱い、児童向けの〈発明物語〉の内実を問い直したい。「どうです私の愛する読者の皆さん」（G）と読者に対して呼びかける形を取る〈発明物語〉は児童の教化にその目的があったことは明白であろう。

ではなぜこの時期に児童向けの〈発明物語〉が刊行されたのだろうか。それに答えるためにはまず受容時期IとIIの間に起こった第一次世界大戦下（一九一四―一九一八年）の国内情勢に目を向ける必要がある。第一次世界大戦が教育に与えた影響は次に明らかであろう。

国の盛衰隆替は一にかかつて科学的知識の普及と否とに存す。見よ、欧米先進国が彼が如く隆昌なるも、其の国民が科学的知識の富贍なるに原因するなるを。

（袴田集義『最新図説電気の話』東亜堂、一九一五年）

内国工業の奨励は帝国現下の急務なり。発明は工業の胚子なり萌芽なる、故に工業の進歩發達は発明の力に依るの外途なきものなり。「……」発明界を振興せしめんと欲せば発明家を奮起せしめざるべからず。

（瓜生康一『大発明家と発明界の進歩』二松堂書店、一九一六年）

発明の振興が「一国の盛衰」を左右するとされ、国民を次世代の発明家としてまなざす枠組みが成立したのである。そしてキュリー夫人自体への注目として、戦地で負傷兵にX線車でラジウム治療を施した〈活躍〉も挙げられる。こうして第一次世界大戦下、キュリー夫人の功名と共に一種のラジウムブームが創出されたのである。ラジウム温泉が広まるや否や地方の温泉地はその効果に沸き、ラジウムが全く入っていないラジウム菌磨き、ラジウム煎餅な

どラジウムの名にあやかつて商業化に走る者も出る始末であつた。そこで多数刊行されたのがラジウムの《通俗書》であつた。

このような発明振興とラジウム通俗化の流れの中で《キュリー》は次のように言及され、意義を見出されていた。

其処で女は決して男よりも低能にあらず、見よ世界を驚かしたる大発見者の一人にキュリー夫人があるではないか、女だとして科学的発見の偉効を建つるの能力あり否男子を遙に凌ぎ得べきものである (前掲書『大発明家と発明界の進歩』)

こうして科学立国振興の下で科学者としての《キュリー》は新たに《発見》されたのだ。この引用箇所には続いて「(近頃では)女権論者の議論の引合に彼の女の名前が時々出されてをる」という注目すべき言及が続いている。前項で確認したように反青鞾の立場から称揚された《キュリー》が、今度は「女権論者」から引き合いに出されるという事態が起こっているのである。

以上の時代情勢の中で「発明物語」は読者である児童に読まれたのである。少年少女に対して呼びかける《発明物語》の語り口は少年少女を発明へと駆り立てるためのものであつたのだ。

それでは、どうして偉大な発明、発見は産まれましたか、それは詳しく本叢書『発明物語』に書かれてあるのをごさいます。即ち本叢書を読んでゆけば、それらの発明家が、如何にそのために払つた尊い苦心と努力と、いかな困難に逢つても、

屈せず撓まず尽した勇氣とに鑑みて、皆さんは大いに発奮せずにはゐられないでせう (『G「発明物語」叢書に就て』)

《発明物語》は「偉大な発明、発見」が生まれた背景を知ることによつて、少年少女に「発奮」せよと誘導する。ここで注意したのは「どうして」と因果関係を追究するまなざしこそが、成功という結果から見て事後的にその原因を指定するありかたを生み出しているということである。《伝記文》では矛盾のない生涯として語られた《キュリー》は、離郷、結婚、夫との死別といった様々な人生の転機を抱え込んだ存在である。その人生の転機の因果関係をどのように構成し、どのように説明するのか、そこに作品の個性が表れると言つて良い。

では実際の作品G-Iの表現に即して、その因果関係を作品がどう構成したかを読んでみたい。その際に物語というメディアが採用されたことに注意することにしよう。《伝記文》は説明的であるが、物語は違う。物語は具体的な場面や描写によつて構成されるからである。

《発明物語》は「女だつて一心になれば、きつと偉い仕事もできる、一生懸命になれば、男にだつて負けるものか」(H)という《心掛け》を押し通す人物として《キュリー》を描き出す。それは十六歳の時にロシアの王立科学院に論文を出し金メダルをもらうという(I)、史実にはないエピソードによつて補強され、終結部において「女でもきつと偉い人になつて見せます。なかに本気になれば男にだつて負けるものですか」。かう言つたスクロトヴスカ、

そしてその心掛けを生涯押し通したキュウリー夫人を女の人は特に忘れないで下さい」(一)と反復されている。

作品が〈キュリー〉の転機として描き出したのは結婚である。ではこの結婚という場面を作品はどのように描き出したのか。作品Gはそれを父と娘の対話によつて構成していた。ある日「女は大きくなつたらお嫁に行かねばならぬ。又男のやうに社会の表に立つて腕を発揮することが出来ない」と言つた父に対して、「なぜ腕を発揮することが出来ないでせう」と〈キュリー〉が疑問を投げかける場面がある。父は次のように答えていた。

『女には女のつとめがあるからだ、即ち家庭を取めて行かなければならない、又母となつては子の養育に力を尽くさねばならぬからだよ』とお父さんは云ひました。(G)

この父の発言に対して〈キュリー〉は「女のつとめ」(ジェンダー)を逸脱しようとする。

『さう?』と彼女は考へました。が暫くして彼女は云ひました。

『だつて女だつて何にも出来ないと言ふ法はないワ、ねお父さんさうぢやないの、家庭を造らなければ女たつていつまでも自由だワ、さうすればどんなことでも出来てよ、屹度。』
『まアお前は何を云ふのだ。そんなことは女の考えることぢやない。』とお父さんはそれを打消すやうに云ひました。け

れど彼女はこの時自分は大きくなつたら男と同じやうに勉強して偉くなりたいと思ひ込みました。(G)

〈キュリー〉が考へたのは「家庭を造ら」ずに「勉強して偉く」という道であつた。父が対立人物の役割を担い、作品は「家庭」と「勉強して偉く」なること(=「社会の表に立つて腕を発揮すること」の両立をまずは否定し、二つを相容れないものとして据えているのである。しかしピエールの結婚の申し出を受け、〈キュリー〉は次のように思案した末、結婚を決意していた。

『自分は始め結婚したくないと思つた。けれど自分はどんな結婚をしたくなかつたのだらう。おそらくそれは詰らない結婚するより、自分の好きな科学の研究に一生を送つた方がましだと思つたのだ。が今の場合は違ふ、共に目的に向つて進むために結婚しやうといふのだ。それはどんなに嬉しい望ましいことだか知れない、況して相手は師のキュリー博士だ。』

彼女はさう思ひました。(G)

こは唯一、作品において〈キュリー〉の内面が語られる場面である。ここでは「家庭」か「科学の研究」という二者択一を乗り越えて、「目的に向つて進むために結婚」という意味の読み換えがあたかも内発的なものとして行われているのだ。このやうな家庭と社会進出の両立を肯定する解釈は、「職業婦人」が登場

した当時の社会からの要請と歩を合わせたものだったのである。

昔の様に女は家の中に閉込つて居ればよかつた時代なら、女に立志伝は要らなかつたかも知れませんが、今日の如く、女も男と同様、生存競争の巷に立たねばならぬ世の中となりましては、女の読む立志伝の必要を感じずには居られません。

〔澤田撫松「大正婦人立志伝」大日本雄弁会講談社、一九二二年〕

ラジオウムの発明という〈成功〉の地点から遡及したまなざしは「目的に向つて進むため」の結婚として〈キュリー〉の人生の転機を組み立てていた。それは〈家庭〉か〈職業〉かという二者択一を乗り越える認識へと読者を導いたのではなかつたか。そこに物語の力がある。父娘の対話から結婚に至るまでの伏線は〈家庭〉と〈職業〉を両立しないものとする従来の意味付けから離陸させるための仕掛けだったのだ。物語は具体的な場面を通じて人生を読者に伝える。〈発明物語〉は物語の具体的な場面を通じ、児童と〈キュリー〉を接続した。そこで〈キュリー〉は新たな意味の下で生きることになるのである。

五 結びにかえて

本稿ではキュリー夫人の生涯を題材とした作品を考察し、〈キュリー〉の価値が女子教育の思潮や発明振興を目指す国内情勢といった、〈キュリー〉の科学上の評価とは別次元のところで創出されていったことを、メディアの語りの特徴を視野に入れて明らかにし

た。今回は一九〇〇年から一九二〇年代をターゲットにしたが、この後〈キュリー〉は『自伝』刊行によつて新たな「真実」の下に受容されることになる。そして一九三二年の石井悦朗による『キュリー夫人伝』、一九三七年の山本有三による『人類の進歩につくした人々』、一九三八年の『キュリー夫人伝』に至るまで〈キュリー〉は女子教育の文脈の中で意味を読み込まれてきた。本稿では紙幅の関係で取り落としたが、これらの問題は稿を改めて論じたい。

- 1 畿田伸司「戦後国語教科書に描かれた女性像『キュリー夫人』を中心にし
て」〔鳴門教育大学研究紀要〕二二、二〇〇七年
- 2 「『キュリー夫人伝』がすぐさま日本で翻訳されたのも、翻訳者や出版社が
これを「女の立身出世物語」だと見なしたからだと言われています」〔川島
慶子「マリ・キュリーの挑戦 科学・ジェンダー・戦争」トランスビュー、
二〇一六年六月〕
- 3 「『キュリー夫人伝』は戦争の文脈で日本に受容された傾向がある」〔川辺久
仁「太宰治『女性徒』に挙げられた図書、映画―読者の『女性』と表象受
容とその振幅―」〔阪神近代文学研究〕十四、二〇一三年五月〕
- 4 「『家庭百科全書』 広告文（E）『偉人の妻』 巻末より。『世の良妻賢母は言
ふも更なり未だ在学校中の女流学生達のためにも裨益多かるべきかは敢て多
言を要せざる所』とある。
- 5 『東京物理学校雑誌』一三三号、一九〇二年
左座金藏「らちむ光線ノ生理的作用及治療的応用」〔医事新聞〕医事新
聞社、一九〇四年 など十編。
- 6 小山静子「良妻賢母という規範」〔勁草書房、一九九一年十月〕「夫や舅姑
に対する従順という徳目が第一に求められた」江戸期に対して、明治啓蒙

- 期に「時代の国民養成を担う、国家に組み込まれた存在」として「良妻賢母」規範が成立した。
- ただしFを読むとコークランの原著には「婦唱夫随」的な要素もある。しかしA～Eでは削除されている。
- 8 高須梅溪『新時代普通文』（実業之日本社、一九一一年十月）
- 9 筒井清忠『日本型』教養の運命（岩波書店、一九九五年五月）
- 10 大町桂月『家庭と学生』（日高有倫堂、一九〇五年六月）
- 11 『婦人の典型』の広告文より（コークラン『友誼と理想より観たる婦人の精髓』、警醒社、一九一七年卷末）。「殊に社会研究家、文明批評家、教育者に対して必須材料を供給す」「文部省認定書」とある。
- 12 一八九九年の高等女学校令公布以降、一九一〇年には高等女学校数は一九三校、生徒数は五千人を超える。一九二〇年には学校数が三三六校、生徒数が一万五千人を超え、飛躍的に女子中等教育が普及した。（文部省編『学制百年史』一九七二年）
- 13 山口与平は『ラヂウム』（読書会、一九一五年）において「近來ラヂウム、ラヂウムと世間に喧伝せられ（…）ラヂウムの流行ばかりで知識が知られていないので（…）素養のない人にまでも十分解るやうに書いて置く考へである」と述べている。三沢素竹『通俗ラヂウム実験談』（東洋ラヂウム協会、一九一三年）ほか多数。
- 14 キュリー夫人は一九一一年二月ノーベル化学賞を単独受賞した。無論その影響もあるが、本稿は表象の中の〈キュリー〉を対象とする立場をとり、全てをそれに帰することはしない。

（北鎌倉女子学園中学・高等学校）